日本学術会議
情報学委員会　国際サイエンスデータ分科会 CODATA 小委員会
（第 26 期・第 1 回）
議事要旨

日時:　2024 年 2 月 5 日 15:00-17:00
場所:　オンライン開催
議題:

1. 第 26 期委員自己紹介
2. CODATA/CODATA 小委員会について
3. 役員の選任
4. CODATA 活動報告
5. メールアドレスの共有について
6. 議事要旨確認の委員長への一任について
7. その他

資料:

1. 26 期 CODATA 小委員会設置提案書(芦野委員)
2. 26 期 CODATA 小委員会名簿(芦野委員)
3. 2023 年(25 期)CODATA 総会派遣報告(大武委員)
4. 2023 年 CODATA 総会メモ(芦野委員)
5. IDPC CODATA Candidate Data Analysis(第 1 回 EC 資料)
6. CODATA Strategic Plan 2023-2027(2023 年総会資料)

出席者(敬称略): 井上 純哉、永崎 研宣、中西 友子、村山 泰啓、芦野 俊宏、
岩田 修一、五條堀 孝、中島 律子、船守 美穂、鎗目 雅
門平 卓也(オブザーバー)
出席 10 名(定足数 7 名)

議事:
(議事次第の議題 1、2 を入れ替え)
議題 1. 名簿に沿って出席している委員の自己紹介、欠席している委員については設置世話人である芦野委員による簡単な紹介が行われた。

議題 2. 設置世話人である芦野委員より、CODATA 設立の経緯や活動、近年の状況、第 26 期 CODATA 小委員会設置提案書に基づいて小委員会の主旨、内容などについて説明がされた。
- CODATA に加盟する国内の機関が無いという点について質問があった。当初は分野横

断の国際組織として日本学術会議副会長預かりの研究連絡委員会として活動したが、その後学術会議の組織の委員会構造への再編があり、情報学委員会の下の国際対応の分科会となり、現在の国際サイエンスデータ分科会が発足した。この新たな分科会の発足にあたっては、ICSU の下で連携しながら活動を続けていた WDS、CODATA に対応して、日本学術会議としても分科会の下に CODATA、WDS の 2 つの小委員会を置くこととなった。ICSU と ISSC が合併し上部機関となった ISC において CODATA は Committee on Data と名称を変更し、その合併に対応してこれまで以上に分野横断的な活動を展開しているが、日本学術会議は CODATA の創立メンバーであり、国際的にオープンなデータ活動への貢献や分担金などでも大きな役割を果たしている。国内には情報知識学会 CODATA 部会が存在するが、こちらについては日本における CODATA としての独自の活動を展開することはなかなか出来ていない。

議題 3. 芦野委員が委員長に選任された。委員長より、CODATA EC のメンバーと国内委員会の委員長を兼務することが困難になりつつあるので 2 年後の総会では EC メンバー候補を別の方にお願いしたいというコメントがあった。副委員長として井上委員が指名され、受諾された。幹事については委員長より依頼することとした。

議題 4. CODATA の活動について資料 3-5 に基づいて芦野委員長より説明があった。
- IDW(International Data Week) 2023 には会場で 700 名近くの参加者があったが、日本からの参加者は 10 名程度であった。
- IDW において CODATA と WDS の共催により SciDataCon2023 が開催された。この中では大武委員が、現在議長をしている CODATA Working Group について発表を行った。
- CODATA 総会には日本学術会議の代表として大武委員が、EC メンバーとして芦野委員長が、オブザーバーとして村山委員が出席した。
- 10 件の新規・継続 TG の提案があり、全て認められた。我が国からは大武委員が新しい Task Group の提案を行い、採択された。
- 会長選挙では、Dr. Mercè Crosas と前副会長の Dr. Jianhui Li が立候補して Dr. Crosas が当選。副会長は 4 名の候補からニュージーランドの Dr. Hartshorn, 南アフリカの Dr. Selematsela が当選。EC メンバーは 16 名から 10 名の選挙となり、日本学術会議からの推薦により立候補した芦野委員長が 16 名中 6 位で当選し、日本からの役員となった。
- 会計報告では、2022 年の収入は 500,000 ユーロ、うちメンバーシップは 200,000 ユーロであり、これ以外は ISC の Decadal Program, EU の WorldFAIR など期限付きのプロジェクト予算であり、収支が均衡していることが説明された。
- オーストリアが新規のナショナル・メンバー、DDE (Deep-Time Digital Earth)と CESSDA(Consortium of European Social Science Data Archives)が新規の組織メンバーとして加わった(配布資料に機関メンバーとあるのは organizational member の誤訳)。

- 2023年12月に新メンバーによる第1回のExecutive Committeeが開催され、メンバーの自己紹介、この後2年間の分担やスケジュールなどが協議された。
- 上記にてIDPC (International Data Policy Committee)の新しい体制について100名程度の候補から50名ほどが選ばれたとの報告があり、国籍や専門分野の分布、次回CODATA総会までの作業プランなどが示された。我が国からは船守委員と鎗目委員が参加する。
- メンバーも多く、トピックも多岐に渡るため複数のワーキングストリーム(WS)を設け、メンバーは数か月間WSの内容を検討して適したWSに参加して活動する。船守委員からもWSのテーマを提案している。
- データに関する問題が扱われる場が拡大し、かつGenerative AIの問題などデータポリシーに関わる問題が多岐に渡るため焦点を定めた実質的な活動が難しくなっている。このため若手研究者も加わってもらえるようにする、トピックに沿って複数のWSを立てるなどの新しい試みを始めている。
- 中国が熱心であり、昨年は北京と深圳で会議を開催して宣言文などを出している。今回もIDPCに対して10名以上のノミネーションがあった。GOSC (Global Open Science Cloud)のExecutive Directorであり、現在CODATAのEC会議にも出席しているDr. Lili Zhangが熱心に活動している。
- 中国では国際的にデータに関わる活動をする人がそれなりのポジションを得ているが日本などではなかなかうまくいっていない。CODATA等の国際的な活動を国内で評価する体制が必要ではないか。
- 中国ではトップダウンでサステナビリティを実現するための国際的なデータ活用というテーマがあり、これに沿ってProfessor Guo Huadongのような活動が位置づけられている。国連の動きに乗って国としてのポジショニングを確立しようという政治・戦略的な動きの一環である。
- 日本ではこのような国家戦略が希薄なためにオープンサイエンス・オープンデータに関わる国際展開にしても個別の対応にならざるを得ず、国際組織に関与するような主体が作り難いのではないか。
- CODATAの国内委員会として、研究データに関わる問題について国際的にどのような活動を行っていくかなど分科会を通してシンポジウムなり提言なりを出していくというのが一つのルート。CODATAは日本学術会議がナショナル・メンバーとしてデータポリシーなどの問題について国を代表する声を国際的に挙げてゆける立場。WDSはデータリポジトリ（データ保存、管理機関）等が加盟して構成する組織であり、コミュニティ機能や特徴が異なるため、それぞれの役割に即して発信をしていくのが適切。
- ゲノムのデータの扱いなどについてかつて次田先生がリーダーシップを取って国際的に発信していったことはCODATAを通じた日本の大きな国際的貢献。
- JSTではファンディングした研究成果について政府の方針に従ってデータポリシーなどを定めている。また、機関としても研究成果公開に対するデータポリシーを定め、研究評

価についても国際的な基準もあり機構内での業務につきオープンサイエンスが広がりつつある。ファンディングでの研究者評価については、国際活動も含めオープンサイエンスにかかる活動を反映するものではないと考えられている。
- CODATA のような広い分野を扱う組織として、どのような行動をするべきか多くの意見を集めて集約するべきではないか。
- 先日来オンラインで意見交換をし、複数の研究者の議論をして見解をまとめて小委員会として出してゆく方向でよいのではないか。
- 前期に国際サイエンスデータ分科会で提言等まとめるべきではないかという議論があったが、オープンサイエンスプラットフォーム、学術会議の課題別委員会など活動のある中で国際サイエンスデータ分科会として何を出すべきか、また提言と見解の違いなど発出の方法、研究分野によってデータの扱いや方針が違う等の問題があり、25 期は提言等を発出しなかった。しかしながら次の世代に向けて学術界が日本として何を成してゆくべきか等、見解を公開していくことは重要。
- 見解等を出すには分科会とも議論が必要となるので協議してゆく。
- 総会において CODATA Strategic Plan 2023-2027 が承認され、Making Data Work, Data Policy, The Science of Data and Data Stewardship, Data Skills and Education という 4 つの分野を基本として活動してゆくこととなった
- IDPC の多くのテーマに AI が関わっているが、NII の AI センターの研究者に声をかけてもよいか。追加が可能なのかどうか。
- CODATA 側から分野を指定して加わって頂くというより、挙げられている分野、特に IDPC であれば AI そのものというよりは AI での活用を考えたデータポリシー、データガバナンスの課題について個々の研究者がボランタリーに加わっていくのではないか。
- AI と社会との関りなどに関して科学者としての見識に基づいて国際的な場において発言して頂くべき。

議題 5. メールアドレスの共有について
- メールアドレスの共有について承認された

議題 6. 議事要旨確認の委員長への一任について
- 議事要旨についてはメール等を用いて委員会で共有し、委員長が確認することが認められた。

議題 7. その他
- CODATA の活動分野も広がっているので、関連分野の方を随時加えることも考慮することで承認された。
この後、今期の開催予定に関して委員長より説明などの後、閉会。